2020年1月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第516号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

「U－35」――◇◆◇◆◇

35歳以下の若手建築家による建築の展覧会

10度目の挑戦

文／建築家・平沼孝啓

※本稿は、2019年10月12日の時点で執筆していただいたものです。

わが国は世界一の地震国家である。そして今日、首都圏を直撃する進路をとる第19号のような台風が往来する経験数も世界一となり、見方によると自然災害が最も頻繁に起こる島国であると言えるだろう。創起2000年を超える出雲大社や伊勢神宮に代表されるように、式年遷宮のシステムを生み出したのは、ある種の自然対策とも云えるだろう。そして何よりも、この最も危険な地域に、現在まで発展した都市を生み出し、自然の変動に対して最も安全な建築を創造し続けてきた技術力は世界で唯一と言える。これは大いに誇れるものであるかもしれない。2019年磯崎新が受賞した、建築のノーベル賞と称されるプリツカー賞受賞者数を見ても、世界で最も多いナショナリティとなった。

若い世代の建築家たちが集い、議論を交わし、未来を創造しようとしている

だが近年、未曾有の災害をもたらした東日本大震災を機に、建築家のみならず、多くの人びとがこれからの未来の建築について考え直すようになった。原発の問題や各地で毎年起こる自然災害が重なり、対策を講じてきたはずの復興には、まだ長い年月がかかることが予想される。しかしである。このような状況の中でも、これからの建築界を担っていく最も若い世代の建築家たちが集い、議論を交しながら、それぞれの独自の思考によって未来を創造しようとしていることを知ってほしい。そして世代を超えた建築家たちが、互いに建築の未来についての考えを示し、社会に「語り合える場」をもつことで、次の時代を切り開いていくための教育の現場と、日本建築のオリジナリティをつくり続けているということを。

Under 35 Architects exhibition 2019
OPERATION BOOK
35歳以下の若手建築家による建築の展覧会（2019）図録
版型：A5版
項数：188ページ フルカラー
ISBN978-4-905436-16-4
定価：￥926（税別）
発行：アートアンドアーキテクトフェスタ

そのひとつが「U－35」（35歳以下の若手建築家による建築の展覧会）である。

本展は、活動の拠点が異なる地域で活躍する、出展者よりひと世代上の日本を代表する建築家・史家［平沼孝啓（関西）を中心に、藤本壮介（関東）、五十嵐太郎（東北）、五十嵐淳（北海道）、倉方俊輔（九州）］他が、全国の若手設計者に発表の機会を与えることを意図し、毎年秋に開催している。また、この「U－35」は、同年春に先行発売する展覧会のオペレーションブック（図録）を出版することからはじめている（初版3000部 地方・小出版流通センターを通じて全国建築専門書店にて取り扱い）。現在では、事前出版によって、約2週間の開催で約1万人の動員をする程の周知効果にもなっているのだが、高等教育や中等教育にも役立ててもらいたいという思いも重なっている成果なのか、開催地である大阪を中心に、毎年、関西地区の多くの学校がこの「U－35」の開催に授業の一環として訪れ、わが国の建築界の中心で貢献し続ける、注目すべき建築技術を持った若手を生み出すような、著しい教育上の効果を発揮している。つまり出展者へは、積極的な創作活動への支援を行い、一方、建築の展覧会としては、市民や建築の従事者、専門家教育者や大学教員、高等教育者や後続する学生らに向けて利便性の高い場所で横断的に発表する「建築の展覧会」となっているのである。

具体的には、将来性の高い若手建築家による新たな空間表現を、図面や模型、写真や映像、インタラクティブな現代のデジタル手法を用いて展示することで、近代主義の先にある「これからの街・建築」へ向けた、新たな発見や価値、産業を生む可能性を提示している。そこに特徴がある。建築界は、美術界と違い、新たな作家を評論家が見出すものではない。先輩となる我々作家が、若手の新たな価値を見出していくような特殊な分野である。社会基

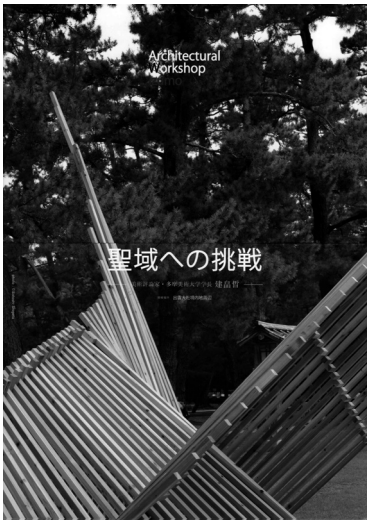
盤や地域の発展、人口の増減や時代の価値に合わせて都市をリメイクし続けていく上で、建築に携わる建築家は増え続けていくことが予想される。だからこそ後進に発表の機会を設けることを目的とし、出展建築家の募集には、ひと世代上の建築家らの推薦枠を設けて毎年一人ずつ指名候補者を挙げてもらっているのである。加えて一般公募による自薦応募審査を経て選出することで、まだ見ぬ才能をもった若手にチャンスをひろげ、国内からの応募にとどまらず、海外で意欲的に活動する若手建築家にも機会を与えてきたのである。

その効果は著しかった。初年度より出展した大西麻貴、デンマークで活躍する加藤＋ヴィクトリア、３年連続で出展した増田大坪や米澤隆、そして、能作兄弟や海法圭、高濱史子や、最も若い参加となった岡田翔太郎など、この「Ｕ－３５」への出展が契機になって現在各地で活動する建築家の幅を広げることとなった。つまりこの展覧会が「建築家への登竜門」とした位置づけられ、世界の各地域性を条件とする設計手法のオリジナリティが求められるような建築プログラムや設計を、日本の建築家たちが担うという結果にもつながっているのである。

例えば、フランス・ルーブル美術館の新館ランス（設計：妹島和世＋西沢立衛）やフランス近代美術館ポンピドゥー・センターの分館メス（設計：坂茂）、NYの同時多発テロにより崩壊したツインタワー建て替えの一棟目、TOWER4（設計：槇文彦）等々。建築教育の発展と世界の産業に優れた貢献をする契機として、この展覧会「Ｕ－３５」が定着している証左となっている。

全国規模で注目を集める建築家への登竜門として定着した「Ｕ－３５」

結果として2010年から始まり、現在は全国規模で注目を集める建築家への登竜門として定着してきたこの「Ｕ－３５」は、これまで脚光をあびることのなかった若手建築家たちの新鮮な発想力と、人にとって豊かな空間のあり方を模索しながらひたむきに建築と向き合う様が、来場者の共感をよび、開催を始めた当初の予想以上の大きな反響を得ている。



建築学生ワークショップ出雲 2019
版型：A4版
項数：81ページ
ISBN978-4-905436-17-1
定価：1,852（税別）
発行：アートアンドアーキテクトフェスタ

建築家は、工学的な知識と芸術的な感性を必要とする高度な職能であることから、40代でもまだまだ若手と称されることもあり、一人前になるには相当の年月を要する。当然、20代、30代では仕事の依頼も少なく、厳しい道のりを乗り越えていかなければいけない。そのようなことを承知の上で言うと、早い時期から独立して活動をはじめた若手建築家たちは、将来の社会的な活躍の可能性がとても大きい。建築周辺のこれからの時代を牽引していく存在として大いに期待してほしい。

そもそも建築展というのはファインアートの美術展のように、展覧会が発表の主体とならないことから発展途上の分野であった。国公立の美術館における最初期の建築展としては、1954年のバウハウス展、1961年のル・コルビュジエ展などが挙げられるが、国内でも、活躍する建築家が毎年のように美術館やホールで、これまで60年間ほど建築展を続けてきた。だが「Ｕ－３５」の開催までは、多くが雑誌や本などの印刷媒体に示され続けてきたような、完成模型作品を並べる展示であった。完成模型の展示は確かに展覧会でしか見せられないが、実際に建った建築と比較すると、空間の体験を可能とする実際の建築の方が、模型と比べものにならないほどの情報を得ることができて経験となるのである。

またこれまでは展覧会を開催する時期や期間が短命であることが多く、近現代の建築家による時限的な発表ばかりで、わが国の古典・伝統建築などを含めた建築の比較展示がなかった。つまり継続性がなく定着しなかったことが、近現代建築と古典・伝統建築を比較するような展示にならなかったひとつの理由でもあるだろうと推測される。

そのため我々は継続性、定着性とともに、古典・伝統建築と比較し得るような、若手へ焦点を充てた展示コンテンツを探ることからはじめたのである。つまり若手が、古典・伝統建築と比較し得るような「今の時代の価値」を示し、一般者には高度な設計手法を、わかり易く示しているかという点に留意した。

そこには、完成時点でひとまず停止する実際の建物を見ても伝えられない、長い時間を費やした設計時の事前スタディにおける建築思想も含まれる。「タイポロジー（建築の歴史から抽出された類型性）に参照された構造のアイディア」や「与えられた環境下でのトポロジー最適化を盛り込んだ意図」などだ。

また特筆すべきことは、竣工を遂げ、使いはじめた建築からでは知る余地もない「施工プロセス」までを表現しようとしている点だ。同類の設計に挑む建築の従事者たちに、研究や設計をする上で思考するきっかけを与え、教科書に副うだけの建築教育ではなく、プロセスという実践を経験するような体験型の建築教育の発展に深く貢献しようとしているのだ。

これら、我々の「Ｕ－３５」におけるコンセプトが、現代の教育現場において斬新なオリジナリティを高い水準で保つことを期待している。

このように継続した実践を重ねてきた「Ｕ－３５」だが、本年は、来週（10月18日）より10度目の開催に挑戦することになる。

＊

令和元年10月12日

（ひらぬま　こうき／建築家）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

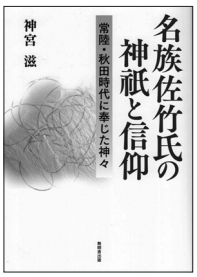
この「新刊ダイジェスト」のバックナンバーを弊社Ｗｅｂサイトにたくさん掲載してます。アドレスは下記の通りです。
ＱＲコードもご利用ください。URL：http://neil.chips.jp/chihosho/digest/index.html

『世界は啄木短歌をどう受容したか』●池田　功著

1912年に26歳で没した石川啄木。国際化に動き出す近代を生きた啄木は海外の文学や文化、さらには政治や社会に強い関心を示し、日韓併合には哀悼の歌を詠み、アメリカや中国に行きたいと望んだが、外国へ行く機会がないままに短い生涯を閉じた。しかし、彼の短歌は今現在も言語や文化の違いを超えて世界中の人々を魅了し続けている。世界で最初に翻訳されたのは1920年の中国で、現在19もの言語に翻訳されており、最近では昨年ドイツ語全訳で『悲しき玩具』が刊行された。なぜ世界はこんなにも啄木を受容してきたのか、国際啄木学会会長である編者が実際の翻訳者や研究者14人の協力を仰ぎ、その魅力や翻訳時の問題点などを考察してもらった。アジア圏・東洋圏は中国、韓国、インド、インドネシア語、西欧圏では英語圏、ドイツ語圏、ロシア語と、それぞれの論考が展開される。三行書きをいかに表現するかなど、苦労が忍ばれるが、英語では4人の訳を比較していて興味深い研究となっている。またロシアでは作品は朗読しながら耳でリズムを感じる人が多いのに対し、日本では黙読して目で印象を重視するといった鑑賞方法の違いからも翻訳は困難を極めたと思われるが、技術的な問題はさておき、生活に根ざした喜怒哀楽など「美よりも真実」を率直に詠む感覚が時代や民族や国境を超えて受容されたのではないだろうか。世界の視点を通した啄木の新たな評価や日本の短歌の魅力が浮かび上がる。

◆1800円・四六判・380頁・**桜出版**・岩手・201910刊・ISBN9784903156293

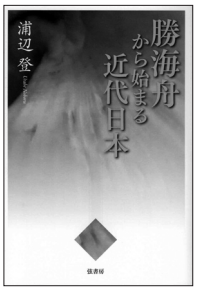
『名族佐竹氏の神祇と信仰 - 常陸・秋田時代に奉じた神々』●神宮　滋著



佐竹氏は、源義家の弟・新羅三郎義光の子孫が常陸久慈郡佐竹郷に土着したのが始まり。以来、常陸佐竹氏として勢力を広げ、やがては北関東屈指の戦国大名となる。関ケ原の戦いで西軍に属したために秋田に転封されたが、近世大名・秋田佐竹氏として幕末にまで至る。その間ざっと７００年、タイトルにも示される通り名族たる所以である。そんな佐竹氏を信仰という側面からアプローチしたのが本書である。中心となるのが八幡信仰と稲荷信仰。河内源氏の祖・源頼信以来、源氏は八幡神を氏神・守護神としてきたが、その流れをくむ佐竹氏も当然八幡神を信仰した。本書によると、佐竹氏による八幡神の勧請は２度あったという。１度目は、佐竹氏の祖・昌義が佐竹郷に土着する際に石清水八幡宮から勧請したという馬場八幡（のち大八幡に改称）。２度目は、15世紀に起きた「佐竹の乱」（山入の乱）の時代、関東管領山内上杉憲定の息・義人が佐竹氏に入嗣後、鶴岡八幡宮から勧請して舞鶴城（太田城）の中に祀った若宮八幡である（のち小<正>八幡に改称）。稲荷もこの頃に伏見から勧請される。秋田に移転後、久保田城内に大八幡・小八幡・稲荷社が並んで建てられた。その他の秋田時代に信仰された神々についても触れているが、著者が発見したという「八幡神像絵」に関する史料はこの本に彩を添えている。ともあれ、多くの史料を掲げながら懇切丁寧に解説している本書は、著者の熱気が伝わってくる労作である。

◆2000円・Ａ５判・243頁・**無明舎出版**・秋田・201911刊・ISBN9784895446570

『勝海舟から始まる近代日本』●浦辺　登著

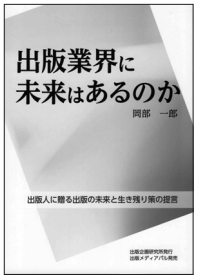


幕末、江戸城無血開城などに活躍した勝海舟。本書はその勝海舟にかかわりの深い人物を追っていくことにより、近代日本のたどった道を考えていきます。まずは勝海舟が深く交流を持った幕末の福岡藩主である黒田長溥。蘭癖大名とまで呼ばれ蘭学に造詣深い黒田の支援で、勝は蘭学を学び幕府内でも一目置かれる存在となっていきます。ちなみにもうひとり支援者として名を挙げられているのが兵庫灘の酒造家嘉納治右衛門。講道館の創始者嘉納治五郎の父です。

こうした幕末から近代にかけて活躍した人々の知られざるつながりが見えてくるのが本書の読みどころのひとつでしょう。その勝に「天下で恐ろしいもの」と言わしめた薩摩の西郷隆盛。実は先述の黒田も薩摩藩から養子に入るなど勝・西郷とも縁が深い。福岡藩は幕末には一時勤皇党として、薩長同盟以前に両藩を和解に持ち込んだりもしました。福岡出身の著者だけに特に地元のことについては詳しい記述がなされていて、福岡の土地が育んだ人脈も感じさせます。今は右翼団体と片付けられてしまうことが多い頭山満が率いた玄洋社についても、アジア主義の理想の下で、孫文をはじめとしたアジアの活動家を支援していた姿が紹介されています。頭山も西郷の思想の影響を強く受けた人物でした。こうした人々に交じり、夏目漱石・宮沢賢治・三島由紀夫といった文学者も顔を出したりします。そうした意想外のつながりからの思わぬ発見が楽しい一冊です。

◆2000円・四六判・252頁・**弦書房**・福岡・201912刊・ISBN9784863291973

『出版業界に未来はあるのか』●岡部一郎著



1996年をピークにした出版物の売り上げの長期低落は留まるところがない。ピーク前には2万3千店ほどあった全国の書店も今や半減している。タイトルの「未来はあるのか」には、出版界はまさに水没寸前、このままでいたら未来どころではなないとの強い警告が込められていると受け止めるべきであろう。著者は取り立てて読書家というわけではないが、本と出会いは夢と冒険の旅であると考えている。だからおめおめと出版界を消滅させるわけにはいかない。

書店、出版社勤務を経て現在の出版プロデューサーの経験から、取次、出版社、書店の業界三者に巣食う病巣を分析し、具体的な生き残り策を提言する。取次は、新規出版社の参入を阻む大手出版社優位の売れた分だけ利益となる口座制を管理手数料方式にし、返品率の高い新刊委託制度から注文流通制へ切り替える。出版社は、類書のない新鮮な本の企画と、本の存在を知ってもらうための営業力の増進、定価の値上げと取引正味を引き下げ。書店は、委託販売に頼らず、勇気をもって自主仕入れを導入し、個性的な店作りをする。生き残りに知恵を絞る書店の事例も示され、理念や希望だけではない極めて具体的な提言である。しかしいずれも長年の商習慣と真正面からぶつかり、その岩盤は厚い。この時に立ち返るべきは、業界は活字文化の担い手であるとの自覚である。本と書店を選ぶ読者も、我がこととして受け止めなければならない問題である。

◆1800円・四六判・175頁・**出版メディアパル**・千葉・201910刊・ISBN9784902251579

『阿波野青畝への旅』●川島由紀子著

昭和初期、俳句に新風を吹き込んだ四S（阿波野青畝、水原秋桜子、高野素十、山口誓子）の一人と言われた阿波野青畝。その俳句が生まれた土壌と生涯を丹念に辿り、作品世界の本質に迫る青畝大全の書である。著者は坪内稔典氏発案の勉強会「青畝を読む会」が縁になって出会った青畝ゆかりの人たちから得た情報をたよりに、青畝の生まれ故郷や結婚後に移り住んだ大阪を旅し、資料を丹念に読み込んだ。青畝ゆかりの写真や詳細な年譜を配し、晩年の青畝の家庭での様子がわかる、ご家族の貴重なインタビューも掲載されている。

ところで、青畝二十歳の時に、「ホトトギス」主催の高浜虚子に向けて、客観写生に対して主観尊重を訴える手紙を書いたという有名なエピソードが本書でも紹介されている。虚子からの返書に「写生を修練しておくということはあなたの藝術を大成する上で大事なこと」とあり、大いに青畝の心に響いた。本書は、この客観写生と主観の問題は、青畝が生涯考え続ける問題となったと指摘している。著者は、そんな青畝の俳句本質論を追いながら自身、俳句とは何かということを考え続けているように読める。著者にとってそれは「（俳句の）『言葉』とは情報を伝える言葉ではなく、アートな命をもつ詩の言葉である」（第二部第二章「アートな溲瓶」）という一節に集約されている。後の青畝の言葉「言葉の命の持っている働きを大切にしないと、意味は運べても心のうちの微妙なものは運べない」に重なり合う。

◆2000円・四六判・230頁・**創風社出版**・愛媛・201910刊・ISBN9784860372842

地方小出版流通センター　ジャンル別新刊案内

2019年11月1日～30日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　１２　ｖｏｌ．６６０　プレスアート編　298mm×232mm　167頁　４５０円　プレスアート　［宮城］　978-4-503-21931-2　19/12

◆**ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ**　４７９　２０１９年１１月号　廣瀬　仁編　Ａ４　192頁　２５４６円　地域環境ネット　［埼玉］　978-4-909864-11-6　19/11

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．５９４　２０１９年１０月号　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　89頁　２９５円　かまくら春秋社　［神奈川］　978-4-7740-0792-2　19/10

◆**くらしと教育をつなぐ　Ｗｅ**　Ｎｏ．２２３　２０１９年１２／１月号　中村　泰子編　Ａ５　80頁　８３０円　フェミックス　［神奈川］　978-4-903579-94-8　19/12

◆**Ｂｅ！**　１３７号　Ｎｏ．１６５　今成　知美編　Ａ５　111頁　８００円　アスク・ヒューマン・ケア　［東京］　978-4-909116-13-0　19/12

◆**児童文芸**　２０１９年１２－１月号　高橋　うらら編　Ａ５　112頁　８００円　あるまじろ書房　［東京］　978-4-904387-24-5　19/12

◆**関東近世史研究**　第８４号　関東近世史研究会編　Ｂ５　112頁　２０００円　岩田書院　［東京］　978-4-503-21922-0　19/10

◆**御影史学論集**　４４　酒向　伸行編　Ｂ５　249頁　２０００円　岩田

本誌【アクセス】で振り返る――追悼　中村哲さん

アフガニスタン復興に生涯を捧げたペシャワール会の中村哲医師が、そのアフガニスタンの地で銃弾に倒れました。心よりご冥福をお祈りいたします。ここに追悼の意味を込めて、過去の中村医師の著書、関連書を取り上げた新刊ダイジェストを再掲いたします。

◇

『医者、用水路を拓く　―アフガンの大地から世界の虚構に挑む』●中村　哲著

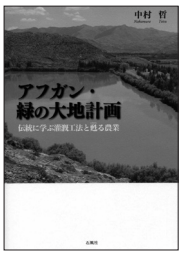
中村医師率いる「ペシャワール会医療サービス」は、二十数年の活動を経て現在に至る。アフガニスタン国境地帯に、戦況によって変動するが、最大8か所の診療所で百数十人が働く。しかし、落命する子供の多くは赤痢によるが、これは、栄養不良児が汚水を飲むことにより起こることに気づいた著者は、「アフガン問題（の本質）はまずパンと水の問題である」と看破し、1500か所の井戸を掘る。それだけでは足りず、ついに乾ききった大地に13kmにわたり用水路を拓き、800ヘクタールの田畑回復と既存の耕地2000ヘクタールを灌漑する。用水路はなお延長工事が続く。本書はその用水路建設の生々しいルポである。

◆1890円・四六判・375頁・福岡・**石風社**・2007/11刊・ISBN978-4-88344-155-6

（2008年2月号より）

『アフガン・緑の大地計画―伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業』●中村　哲著

30数年前、医師としてアフガン国境に赴任した著者は、現地の病気の大部分は清潔な水と十分な食糧があれば解決するとして、1600本の井戸を掘り、38か所のカレーズ（地下水路）を再生した。そして干ばつと洪水で荒廃・砂漠化した大地を甦らせるため、2002年「緑の大地計画」を開始。灌漑用水路25ｋｍを切り開き、3000haの農地を復活させ、現在、14000haの農地と帰還難民15万人を含む60万人に影響を与える。



これら灌漑用水路工事で著者が特に留意するのは、現地の人々が現地に豊富な石材を使って低コストででき、自ら維持、修繕できる工法であった。河川からの困難な取水堰建設の工法は、江戸時代に九州の暴れ川・筑後川中流域に造られた山田堰から多くを学んだ。この章は本書の中心をなし圧巻だ。一連の工事費用30億円はすべて日本国内のカンパによる。巻末にアフガン復興支援について、著者らの地域重視型事業と、政府・援助機関主導事業との比較を行った永山謙二の学術論文が収載される。

◆2484円・A5判・231頁・**石風社**・福岡・2017/6刊・ISBN9784883442713

（2017年9月号より）

『アフガニスタンの大地とともに　―伊藤和也　遺稿・追悼文集』●ペシャワール会編・中村哲ほか著

2008年8月26日、伊藤和也はアフガニスタンの地で凶弾に斃れた。享年31歳。彼の所属するNGOペシャワール会（代表中村哲医師）は、25年前、現地の人々への医療を開始、あわせて1500箇所に井戸を掘り、農業用水路を拓いて3000ヘクタールの田畑を潤した。その農地にふさわしい作物をみつけ、旱魃と戦乱で荒廃した大地に農業を甦らせるのが彼の仕事であった。試験農場でサツマイモ、水稲、ブドウ、茶、除虫菊など次々に作付けながら、現地の「子供たちが将来食べ物に困らないように」するのが彼の願いだった。本書は、現地にとけ込み子供たちに慕われた5年間を多くの写真で紹介し、彼の仕事の報告と追悼文を掲載し、彼が遺した深い志がうかがえる一冊だ。

◆1575円・A5判・261頁・**石風社**・福岡・2009/4刊・ISBN978-4-88344-172-3

（2009年6月号より）

『アフガン農業支援奮闘記』●高橋　修著

清潔な水と食糧があれば大半の命は救える。NGOペシャワール会（代表中村哲医師）は、アフガニスタンで医療、井戸掘り、灌漑用水路開削、そして試験農場の設置へと展開して25年が経過する。本書は、旱魃と戦乱で砂漠化したアフガンの大地で農業の復活を手助けする「緑の大地計画」の実践記録である。この農業支援は、じつは著者の高橋氏による綿密な「農業計画」に基づくものだった。現地の試験農場で作物の栽培試験を重ね、一定の栽培法を確立してから一般農家に普及するという「現地主義、主役は農家」という考えに貫かれている。その成果として水稲、さつまいも、そば、大豆、飼料作物、緑茶等が普及し、海外援助のあり方の本質がそこに見える。

◆2625円・A5判・400頁・**石風社**・福岡・2010/3刊・ISBN978-4-88344-184-6

（2010年6月号より）

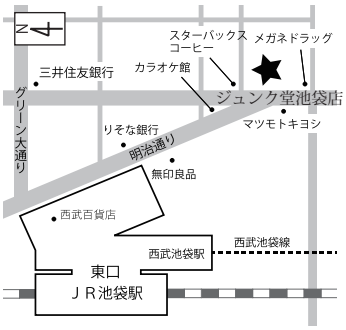
ジュンク堂書店
淳久堂書店

池袋本店
営業時間：月～土 / 午前10時～午後11時
日・祝 / 午前10時～午後10時

池袋であなたのふるさとに帰ってみませんか？

９階「ふるさとの棚」では、
地方・小出版流通センター扱いの
ご当地本を幅広く取り揃え、皆様の
お越しをお待ちしております。

〒171-0022
東京都豊島区南池袋2-15-5
TEL　03-5956-6111
http://www.junkudo.co.jp



売行良好書

期間：2019年11月15日～12月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(2)『石牟礼道子全歌集　海と空のあいだに』2600円・弦書房　(3)『たやすみなさい』2000円・書肆侃侃房　(4)『報道写真集　首里城』1000円・沖縄タイムス社　(5)『駅から登る岡山の山１００座』1700円・吉備人出版　(6)『『焼き場に立つ少年』は何処へ』1100円・長崎新聞社　(7)『明智光秀ゆかりの地を歩く』1500円・サンライズ出版　(8)『医者、用水路を拓く』1800円・石風社　(9)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館　(10)『備前刀の歴史』1000円・吉備人出版　(11)『図説・１７都県放射能測定マップ＋読み解き集』2315円・みんなのデータサイト出版　(12)『柳家喬太郎バラエティブック』1637円・東京かわら版　(13)『近江の能』2500円・サンライズ出版

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『本の雑誌　４３９号』815円・本の雑誌社　(2)『東京かわら版　１２月号』545円・東京かわら版　(3)『おすすめ文庫王国２０２０』800円・本の雑誌社　(4)『母の愛、僕のラブ』1800円・書肆侃侃房　(5)『たやすみなさい』2000円・書肆侃侃房　(6)『柳家喬太郎バラエティブック』1637円・東京かわら版　(7)『高尾山登山詳細図全１１２コース』900円・吉備人出版　(8)『パズル通信ニコリ　Ｖｏｌ．１６９』1000円・ニコリ　(9)『海と空のあいだに』2600円・弦書房　(10)『ひとさらい』1200円・書肆侃侃房

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

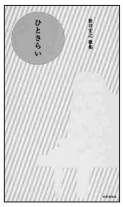
(1)『医者、用水路を拓く』1800円・石風社　(2)『医は国境を越えて』2000円・石風社　(3)『ペシャワールにて　増補版』1800円・石風社　(4)『医者井戸を掘る』1800円・石風社　(5)『辺境で診る　辺境から見る』1800円・石風社　(6)『ダラエヌールへの道』2000円・石風社　(7)『アフガン緑の大地計画』2300円・石風社　(8)『埼玉の古墳めぐり』1800円・さきたま出版会　(9)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(10)『備前刀の歴史』1000円・吉備人出版　(11)『明智光秀ゆかりの地を歩く』1500円・サンライズ出版　(12)『明日も生きる』1200円・リーブル出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

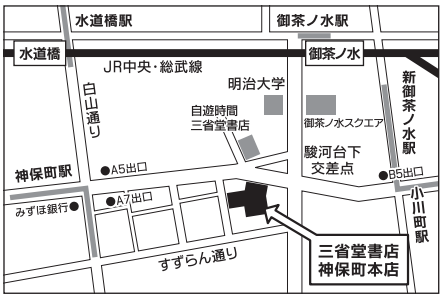
トピックス ―― ★★★

▼アフガニスタンで医療・人道支援をされていたペシャワール会の中村哲さんが亡くなられ、報道番組等でいままでの活動が多く報じられています。中村さんの著書は福岡の石風社から多く発行されていますが、現在品切れのものが多数です。報道に多く引用される【医者用水路を拓く】1,800円（ISBN978-4-88344-155-6）は2019年12月23日に重版が出来ます。これは本誌追悼ページで刊行時の新刊ダイジェスト紹介文を読むことができます。その他【ダラエヌールへの道】【医者井戸を掘る】【医は国境を超えて】【ペシャワールにて】【辺境で診る辺境が見る】の５点は、年明け１月中旬に増刷が出来る予定です。

▼ＮＨＫの「あさいち」で作家の川上未映子氏が紹介した、故・笹井宏之さんの歌集「ひとさらい」1,200円　書肆侃侃房（ｼｮｼｶﾝｶﾝﾎﾞｳ／ISBN978-4-86385-046-0）の問い合せが多く来ています。12/24に重版が出来る予定となっています。10年前に亡くなられた歌人の歌集です。



▼無書店地域だった那須に開店した「那須ブックセンター」も２年になろうとしています。「少しですが、御社の本を売らせて下さい」という挨拶文が付いたファックス注文書に付記された添書きを見ると、９月入店ランキングは「1位　昆虫　2位　人間　3位　葉っぱ」、そして10月は「1位　葉っぱ　2位　人間　3位　昆虫」、「さて11月はどうなるか？～人間の皆さん応援よろしく」とありました。何か、お店のたたずまいが見えるようです。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。